雁塔聖教序建立の経緯

荒金信治

はじめに

雁塔聖教序（資料1参照）とは、大唐三蔵聖教序碑と大唐三蔵聖教序記碑の両碑の集合名詞である。勿論、雁塔聖教序の両碑の正しい位置関係は、

① 序　碑、西側

② 序記碑、東側

であり、両碑は完全に嵌め込まれていた。（注1）

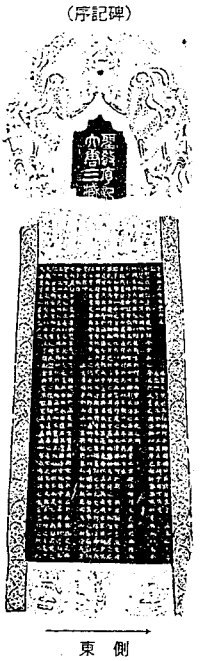
両碑の位置に付いては、先般『雁塔聖教序の位置関係における一考察』と題した卑見（注2）を述べているので、拙い原稿であるが見ていただきたい。

この両碑の位置付けに関しては、数多くの著書に誤った記述が成されており、書の学習を行う上において（注3—1）一つの混乱を引き起こしている。このことは雁塔聖教序を臨書する上においても（筆の持ち方や用筆法、等）大切な事であり、単なる位置の間違いとして片付けられない状況に在る。

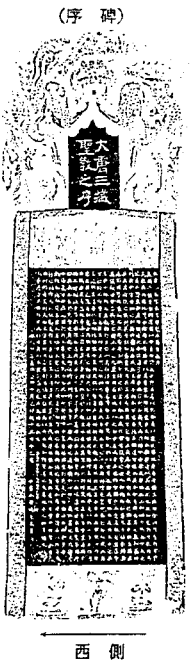
この状況の認識を改め、雁塔聖教序建立の経緯を十分理解して「雁塔聖教序の両碑の位置を『序碑西側・序記碑東側』が正位置とする。」を、書道学上に決定づけるための関連研究の一つに小論がなることを願っている。

小論は、雁塔聖教序建立の経緯六〇〇年代から七〇〇年代の一〇〇

②雁塔聖教序（大唐三蔵聖教序記）



①雁塔聖教序（大唐三蔵聖教之序）



※ ←→ 印は両碑文の行の進行を示している。

（資料1）

年間を考察の対象とする。そこで新唐書・舊唐書などの年譜と資料をもとに年表（注4）を作成した。この資料を参考に、

第一章において雁塔聖教序建立の経緯の一歩となる「大唐三蔵聖教序・大唐三蔵聖教序記の両文が出来るまで」

第二章において「両文が両碑となって建立されるまで」を中心にして、「位置の上位」について考察し、両文が両碑となる上での人々の心理に触れてみたい。

第三章においては、「同州聖教序と集字聖教序が意味すること」に話を進め、「雁塔聖教序」と「同州聖教序、集字聖教序」の相違を見る。雁塔聖教序建立の経緯を考察することによって、雁塔聖教序を中心に繰り広げられていく、太宗に対する高宗の心理表現に焦点を合わせてみたい。

論を進めるとき、文献は大きな決め手となる。しかし、文献のみに縛られてしまうと、いつのまにか知らず知らずのうちに大きな過ちを犯してしまう恐れもある。まさに、両碑の誤った配置表示がそれである。現地を訪れ、自分の目で現地を見聞する。時には現地の声も文献以上に重要となる場合がある。

小論においては、文献はもとより現地を代表する人の声も十分に取り入れ、雁塔聖教序建立の経緯に纏わる事情やいきさつを中心に管見の範囲であるが述べてみたい。

第一章　大唐三蔵聖教序・大唐三蔵聖教序記の両文が出来るまで

雁塔聖教序の経緯の第一歩として両文が出来るまでのことについて記すことにする。両文が出来るまでのことを理解することは、雁塔聖教序の両碑のそれぞれが持つ、両碑の存在する役割を周知することにある。

第一節　序・序記の両文が出来上がるいきさつ

（両文が書かれた目的について）

まず、序・序記の両文が何のために書かれたかについて述べてみる。

1、『大唐三蔵聖教序』は、皇帝太宗が玄奘三蔵を褒め称え讃美するために作ったものであり、その内容は玄奘三蔵が西へ経典将来の為の途中に於いて苦労したことや、中国の仏教文化などに重要な貢献をした事を褒め称えている。

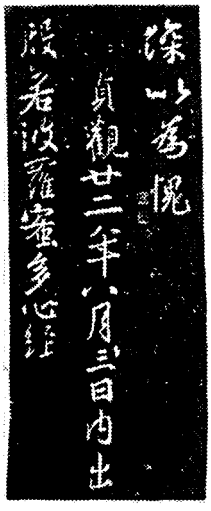
2、『大唐三蔵聖教序記』は、皇太子・李治が太宗皇帝を褒め称えるために作られたものであり、その内容は太宗皇帝が玄奘三蔵のために「大唐三蔵聖教序」という素晴らしい文を作られたことを褒め称えるためのもの。

である。（注5）に両碑の全文を示す。

この両文が書かれた目的についての理解には両碑のいずれが主なる立場であるかを判断することにある。例え皇帝が代わろうと又だれが次の新しい皇帝になろうと、両碑の文面の意味は変わらないはずであり、その意味が変わらないと言うことは皇帝が代わっても文面の持つ主なる人物の立場も変わらないと言うことである。ここで言うと太宗の序の文は高宗の序記の文より常に主なる立場にあると言うことになる。

（両文が書かれた年代について）

集字聖教序（六七二年）の部分に（資料2）「貞観廿二年（六四八年）八月三日内出」（注6）「書道全集8、38ページ参照」関連記事を記す。



（資料2）

とある。

「貞観廿二年八月三日内出」とすれば発表は八月四日となる。大慈恩寺三蔵法師傳に次の記述があることより、

聖教序に八月四日製訖

聖教序記に謹啓貞觀二十二年八月五日沙門玄奘上啓

六四八年八月四日に太宗が大唐三蔵聖教序の文章を発表し、それを受けて同年八月五日皇太子の李治が大唐三蔵聖教序記の文章を記した。大雁塔が建立されたのが六四八年十二月の事であるから、これより四か月前のことである。

この時、褚遂良は両皇帝より厚い信頼を受けており、この両碑はもう褚遂良によって揮毫される事が決定し、直ぐに褚遂良も下書きに入ったと見ることができる。

第二節　雁塔聖教序の初めの姿

大雁塔建立以前に、雁塔聖教序の両文は作られている。しかし、雁塔聖教序のその初めの姿がどんなもので在ったかは分からない。幾つかの資料をもとに、想像を巡らせてみた。「雁塔聖教序には、紙に書かれた原稿のようなものがあった。その姿には二つの型が存在した。」と、次にその考えを示す。

（二枚の紙を用いての原稿）

二枚の紙を用いて一枚ずつに大唐三蔵聖教序・大唐三蔵聖教序記を褚遂良が書いたもの（資料3参照）。

この考えは、両文の趣旨が違うこと、皇帝・皇太子と両者の立場が違うこと。そして、前記の通り太宗が書いた序は「六四八年八月四日」に出来、高宗（李治）が書いた序記は「六四八年八月五日」と同時に両文が出来たのではないところからくる。

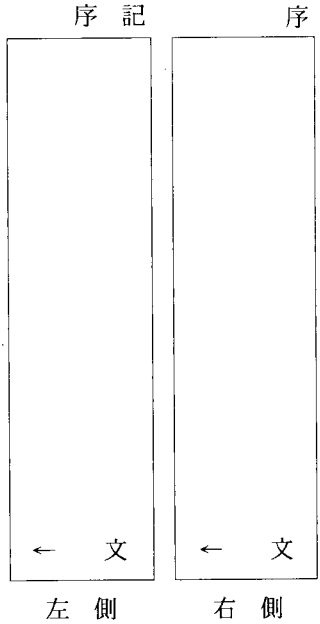
この時の序記は序同様に、右から左へ書かれていただろう。両文の位置も、書き上げた順に意図無く「序を右。序記を左」とおき、両文の順位は「(1) 序 (2) 序記」であっただろう。

両文の文字表現は二つとも、現存の序碑の本文の文字表現と同じ様に書かれていただろう。

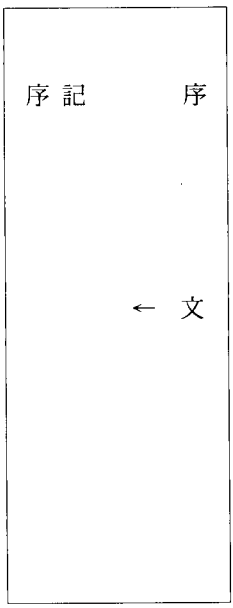
将来完成する序碑はこの時の原稿に補筆されたもの（これについての関連記事は第二章三節に記入）であり、序記碑は皇帝の移動・両碑建立による両碑の位置設定と相重なり、褚遂良が再度揮毫した（揮毫推定日六四八年八月五日～六五〇年十一月又は、六五二年～六五三年）ものを石刻したものと考えられる。

（一枚の紙を用いての原稿）

一枚の紙の面を用いて右から左への順に、序から序記へと褚遂良が書いたもの（資料4参照）。



（資料3）



（資料4）

その時の両文の順位も、書かれた順に意図無く（1）序（2）序記であっただろう。これは前項と異なり両文が出揃ったところで、褚遂良が再度書き改めた原稿の一つとする。表現は「現存の大唐三蔵聖教序碑に見られるもので、両文一枚の紙に同じ表現で書かれていた。

同州聖教序の碑の位置形式と同じであるところからの想像であるが、この影響を受け高宗の協力の基に、同州聖教序と集字聖教序の建立は、行われたと考えられる。

この二枚の紙を用いたものと、一枚の紙を用いたものの二原稿は高宗が手の届く程の近いところで保管されていたことだろう。

第二章　両文が両碑となって建立されるまで

六四九年五月二十四日、太宗の崩御に伴ない、新皇帝を取り巻く者たちの中において、雁塔聖教序建立に対する考え方の変化が当然起きた事だろう。

この時に、両文が両碑となったのだが、両碑の位置の上位の問題が新皇帝を取り巻く者たちの中において重要課題となっただろう。

この章に於いては、位置の上位を巡る両碑の配置と雁塔聖教序の配置決定に及ぶ状況について考察してみたい。

第一節　位置の上位について

雁塔聖教序の両碑建立に関しては、まず両碑の配置が問題となる。建立の際の両碑の位置の上位の問題である。この時点までは雁塔聖教序の両文が作られた目的を見ても理解できる様に、総てが太宗の手に因って書かれた大唐三蔵聖教序が上位を占めてきた。これは文意の上から当然の事であるが、皇帝が代わると周囲は両皇帝を立てる工夫を凝らし始める。ここで考えられる両碑の配置の上位については「別府大学国語国文学第33号」に記載しているのでそれを見ていただき、その記事と、訪中において得た大慈恩寺管理委員会副主任の永明氏が語る「位置の上位」についての中国並びに大慈恩寺における現状と比較してほしい。

（資料5）

西側	中央	東側
普賢菩薩	釈迦牟尼仏	文殊菩薩
	（南向き）	

第一項　上位について

（左右の上位について）

左右の上位問題は、「中国では『左』が上位である。この時、誰がどちらを向いての『左か右か』も問題となる。」

（東西の上位について）

又、「仏像の例を見ると良く判る（資料5参照）。文殊菩薩は普賢菩薩より上位。釈迦牟尼仏が前を向いた状態から見ると文殊菩薩は『左』に存在する。釈迦牟尼仏に向いた状態から見ると文珠菩薩は『右』に存在する。しかし、どちらを向いて立ったとしても文殊菩薩は普賢菩薩より上位である。左右に関係なく、東西においては『東が上位である。』」と、述べられた。

（席はどちらが上位か）

永明氏は、次に席について述べられた。「席については、お客様はA、主人はBの位置という。たとえ、これは外国の首相が来ても同じです。」と、付け加えられた（資料6参照）。

（両碑の現在位置）

それでは改めてここで両碑の現在位置に付いて観察してみたい（資料7参照）。

七〇一年以降、両碑は初層の現在位置に存在しているが、六五三年の両碑建立の際に両碑が初層の現在地に在ったか、どうかはわからない。もちろん、初層に両碑がいつ置かれたかも分かっていない。七〇一年以前の資料はなく、不明である。永明氏も「七〇一年以来、碑の移動はない」と断言した。

（資料６）

＊席順における上位

A	B

（男・女の場合）

B 1 ↓	A
↓ B 9	B

A 1 ↓	A
↓ A 9	B

両碑の現在位置は、小論の文頭の如く、第一層南面の入口を中央にして左側（西側）に『大唐三蔵聖教序碑』を置き、右側（東側）に『大唐三蔵聖教序記碑』が置かれている。

第二項　位置の上位について

第一項を整理してみると、左が上位で、南を向くか、北を向くかでの左右の上位に関係なく東が上位。尚その上にお客様はAで主人はBの位置関係から見ると、皇帝が北を向くと、皇帝から見て左、すなわち西も上位に成りかねないこと。

現在の両碑の配置表示を合わせて考えてみると、大慈恩寺はもともと母・文徳皇后のために皇太子であった李治が立てたお寺である。主人の位置に高宗が立ち、太宗をお客様に据えたとしても、決しておかしくはない。両碑の位置決定の際には皇帝となった高宗も大雁塔に向かって頭を下げただろう。この様に中央を挟んで、左右に分けられた現存の両碑において、高宗は南面して左側に位置し、上位を守る。太宗の序碑が塔に向って左にあり、A（お客様）にあたる位置にあるこのことの方が自然かもしれない。

位置の上位はかなり混乱し、どちらとも上位の様子を見せている。当時の家臣の苦慮の末、結論として主人を高宗、お客様を太宗として現存する両碑の位置になったのだろう。これは両皇帝を立てた素晴らしい配慮であり、大雁塔をより一層大なるものとしている。

位置関係において、総てがこの様に考えられると言うわけではないが、現在の雁塔聖教序の両碑の位置関係は道理にあっている。誤った配置表示をした著書をみると「褚遂良」と刻者「萬文韶」の名前が両碑を見て中央に来る。これこそ不自然である。

それではどちらが上位かと言えば、両碑の行の流れが同じでこの場合の建て方であれば完全に序記碑上位と見て良いだろうが、両碑の行の流れが現在のように序碑は右から左、序記碑は左から右の場合、当然上位は序碑となるだろう。

（資料７）

西側	中央	東側
大唐三蔵聖教序碑（太宗皇帝による文）	第一層の南門（南向き）	大唐三蔵聖教序記碑（皇太子李治による文、建立当時高宗皇帝となっている）

第二節　両碑の建立

（両碑の建立まで両文はどこで保管されていたか）

「両碑が建立当時、大雁塔の最上層に存在した。」と、大慈恩寺三蔵法師傳（唐）慧立彦悰著（注７）に「塔の上層に石を以て室をつくり、南面に両碑あり、二聖の三蔵聖教序記を載す。その書は即ち尚書右僕射河南公褚遂良の筆なり。」とあることに対して、永明氏は否定的であった。永明氏は、「塔の最上層に両碑が存在した話はない。どうして塔上に置くのですか、塔の最上層には経典を置くことがあっても石碑を置くわけがない。たとえ皇帝が書いた物であっても置く意味がない。建立当時から両碑は初層にあった。」と言う。

もし仮に、雁塔聖教序が塔の最上層に在ったとすれば、それは両碑でなく褚遂良が紙に書いた両文のことであったかもしれない。

（生還後両文を再度揮毫したか、否か）

序・序記の両文が両碑となったのは六五三年のことである。もう太宗は崩御されており、褚遂良は同州から生還した次の年にあたる。

六五〇年十一月褚遂良が単に「事に坐す（事件の巻き添えをくふ）」の理由によって、同州へ左遷され同州刺史にさせられ、六五二年一月褚遂良は長安に復権する。

この復権の理由は雁塔聖教序の完成にともない、両文の揮毫日（六四八年）と、雁塔聖教序両碑の建立日（六五三年）の大幅なずれにより、年号部分を書き改める必要性が出てきたために、褚遂良は同州より呼び戻されたと見るべきかも知れない。

褚遂良は生還後、吏部尚書、中書門下三品、監修國史、加光禄大夫、太子賓客となり、六五三年九月褚遂良、尚書右僕射となる。

（生還後両文の一部を再度揮毫の説）

「同州生還後の雁塔聖教序両碑の揮毫」説を改め、「生還後両文の一部を再度揮毫した」の説をここに示す。

左遷された褚遂良は生還後改めて雁塔聖教序の両文全文の揮毫に再度試み何度となく挑んだことだろう。しかし、幾ら褚遂良でも総てを書き改めることはできなかったのでは無いだろうか。左遷はいつの時代においても大変なことである。高宗が褚遂良の気持ちのすべてを理解したうえでの生還ではなかったと想像されるだけに褚遂良の精神も高ぶっていたことだろう。生還後一年足らずで現存する雁塔聖教序の序碑の本文に見られるあの緊張感を表現するだけの精神状態に自分を高めることは困難であっただろう。

故に、同州から生還して雁塔聖教序の揮毫を依頼されても、そう簡単に書けるものではない。特に大唐三蔵聖教序の本文は以前揮毫したものより旨く書けなかったのか、この時期故に序碑を書き改めなかったのか、いずれにしろ石刻したものは以前揮毫した本文に補筆したものとも見られる。

序碑は本文の文字が終始引き締まっているのに対して、序記碑の本文と両碑とも末尾の褚遂良の地位の部分並びに年号部分の文字表現が大きく見える資料8・9・10・11がそれを物語っている。

（資料8）＜序碑の始まり部分＞

第三節　不動を貫く序碑、一転二転する序記碑

（大唐三蔵聖教序記の動き）

序碑は常に不動を貫くが、序記碑は一転二転して現在に至っている。

六四八年、両文ができ、大雁塔が完成したが、この時既に両碑を揮毫する人物（すなわち褚遂良）と、両碑建立の配置の予定場所は決定されていただろう。しかし、皇帝が代わることにより序記碑に一転を生じさせた。六五三年（雁塔聖教序が完成）に両碑の位置が定まる。「高宗の序記を東側（東西における上位）に置き、碑の配置が不自然にならぬ様左右対称に見せるため、高宗の序記を左から右へと行の流れを組み替えた。太宗・高宗の両者を上位に置いた方法、すなわちここで上下混合の処置を見せた。高宗の『序記碑』を東側に置き、主人である事の位置を確保させ、太宗の『序碑』を西側に置き、お客様の位置へと序碑を至極自然に添えた」は、前項でも記した通りである。

文字表現おいても大唐三蔵聖教序記は原稿と建立の時の序記碑と

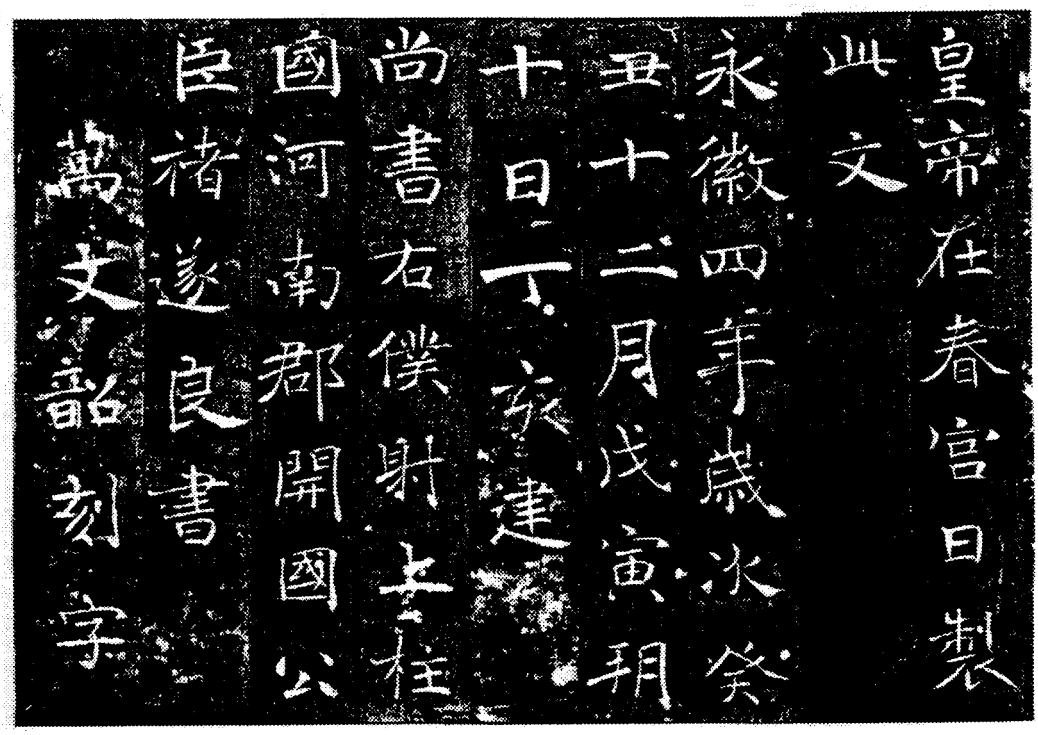
（資料９）

永慶方冀茲經流
施將日月而無窮
斯福遐敷與乾坤
而永大
永徽四年歲次癸
丑十月己卯朔十
五日癸巳建
中書令臣褚遂良
書

<序碑末尾の年号部分>　<序碑本文の末尾部分>

大唐皇帝述三藏
聖教序記
夫顯揚正教非智
無以廣其文崇闡
微言非賢莫能定
其旨蓋真如聖教
者諸法之玄宗衆
經之軌躅也綜括
宏遠奥旨遐深極

<序記碑の文頭部分>
（資料10）



（資料11・序記碑の文末部分）

はかなり違いが見られたであろう。建立の時両碑の位置の変化によって以前とは行の進行方向が変わった事と、褚遂良が再度全文を揮毫したと想像されることからである。序記は末尾の褚遂良の地位の部分並びに年号部分の文字同様に本文も文字の表現が伸び伸びとしているところ。序は本文の文字に比べ、末尾の褚遂良の地位の部分並びに年号部分の文字の大きいことがそれを物語っている。

雁塔聖教序の両碑の文字の大きさの違いと年号部分の大きさの違いが出来た理由を整理すると次のようになる。

o書いた日が違うこと（一つは左遷前、一つは左遷から生還した後に揮　毫）によって生じたため。

o序・序記の行の流れが異なる事によって変わる、両碑の揮毫方法（筆の持ち方の違いによって生まれる変化）が自然に異なっていったため。（注3―2、雁塔聖教序の学び方）

（一転二転する序記碑）

七〇一年に一つの事件が起きる。それは大雁塔の再上層を破壊した大地震である。大雁塔再上層の修復作業に伴い、大雁塔を五層から七層へ延ばしたのである。このことにより、両碑がどの様に動いたかが問題である。ここでも序記碑は一転した可能性を含んでいる。中国西安市にある大雁塔を再度訪ねた（注1参照）時の永明氏との話の途中において、大慈恩寺管理委員会の服務員が「大唐三蔵聖教序記の複製問題」を突如口にした。服務員は序記は一度壊れたと言う。そして、壊れた序記の残碑が今、西安碑林にある。（注8）と、言い出だした。

大地震のために序記碑が破損（これは文献においては見ることは出来ない）し、このとき、序記碑を再度作り替えたとなれば大変なことである。このことにおいては書き止めるだけで済ませるが、このことを見ても不動を貫こうとする序碑と、一転二転している序記碑の姿を伺うことが出来る。

第三章　同州聖教序と集字聖教序が意味すること

以上の事から考えると、太宗・高宗両皇帝の両碑それぞれが持つその存在理由がはっきりしているのに、皇帝の移動により新皇帝（高宗）をとりまく家臣が高宗の序記を上位に添えるための工夫の後が鮮明に浮かび出ている。ただ高宗は太宗崩御の後、序記碑が一転二転するその姿の中に自分の姿を垣間見て、雁塔聖教序とは異なった、新たな聖教序の建立の夢を、次の同州聖教序と集字聖教序の建立に託したのかもしれない。それはまさしく太宗と褚遂良に対する思慕の念であったことだろう。その高宗がその二つの聖教序にどれだけの力を注いだかをここで考察しておきたい。

	雁塔聖教序	同州聖教序、集字聖教序
碑の建て方と配置	序（西・左側） 序記（東・右側）	一つの碑の中に序と序記が並んでいる
碑の行の流れ	序　右から左 序記左から右	序と序記共に右から左

（資料12）

(A) 雁塔聖教序

①（序　碑）
西　側
左　側

②（序記碑）
東　側
右　側

（資料13）

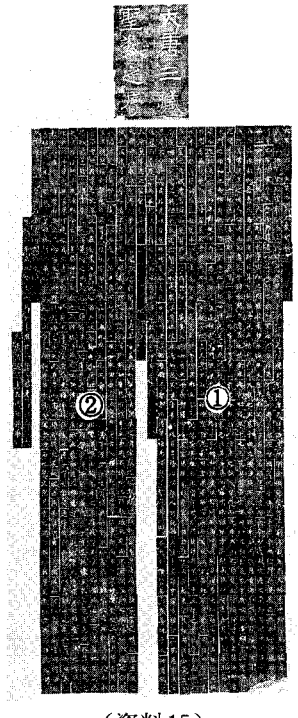
	同州聖教序	集字聖教序
文字の字数	少ない	多い
書体	楷書	行書

（資料14）

その部分を次に示す。

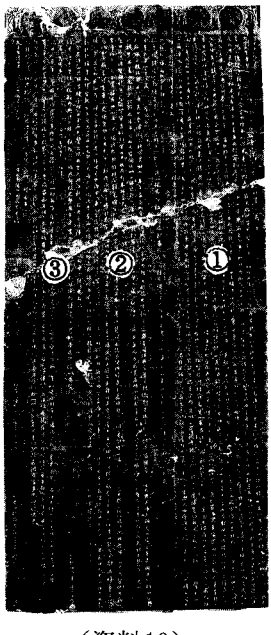
(B) 同州聖教序

（私蔵の原拓をコピーして、別府大学書道研究室で全拓本に再現したもの）



（資料15）

(C) 集字聖教序



（資料16）

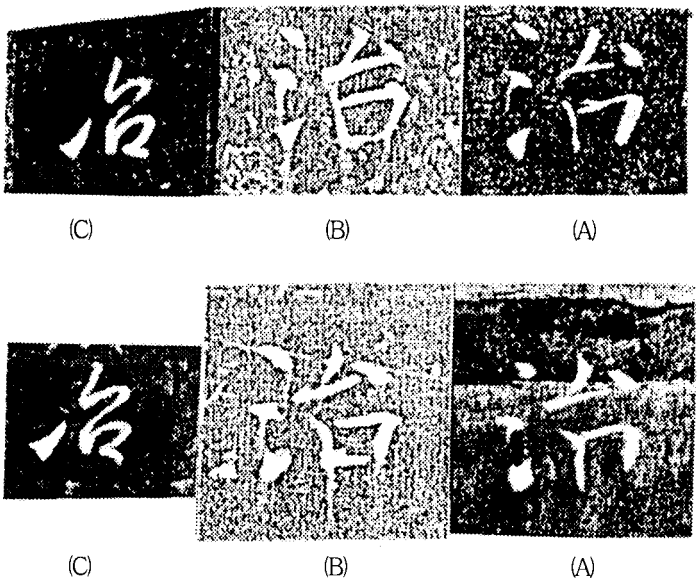
第一節　三つの聖教序を比較する

（注5）で三つの聖教序の前文を活字で比較する。それを受けて次に、「雁塔聖教序」と「同州聖教序、集字聖教序」の相違を図示する。（資料12～16参照）

（文中の文字の違い）

次に、雁塔聖教序を柱として、同州聖教序と集字聖教序の字形の違いも示す。（資料24参照）

(A) 雁塔聖教序　(B) 同州聖教序　(C) 集字聖教序



（資料17）

第二節　同州聖教序が意味すること

第一項　高宗の同州聖教序建立説

（高宗の名前の闕畫部分）

褚遂良死後（六五八年）高宗の地位は次第に軽いものとなって行く。ここでは、半ば左遷状態の皇帝・高宗の政治的現状に注目しなければならない。六六〇年高宗は武皇后に政権を委ねて以後、政治は完全に高宗から武皇后に移行していく。そんな時、高宗皇帝が次第に左遷して死亡させてしまった褚遂良に対して「償いたい」とする気持ちを持ち始めても不思議なことではないだろう。

六六三年六月二十三日建立された同州聖教序（建立主の名前は現在不明）に対する「同州聖教序は高宗が建立したとする、高宗皇帝の褚遂良に対する償い」・「同州聖教序の建立に高宗がなんらかの形で深く関与していた」の考えを述べてみる。

一つは、同州聖教序にある「治」と二つの聖教序にある「治」の比較すると、雁塔聖教序と集字聖教序には高宗の名前・李治の闕畫部分（資料17参照）があるのに比べて同州聖教序には高宗の名前を闕畫していない。高宗の名前を闕畫していないと言う事は高宗自信がその部分を補筆したとも考えられ、同州聖教序が高宗の意思で作られたか、又、高宗自信が同州聖教序の建立に深く関与していたと受けとっても良いだろう。

（同州聖教序の末尾三十文字は誰の書か）

もう一つは「同州聖教序の末尾三十文字の部分を高宗が書いた」と、する考えである。

同州聖教序の末尾三十文字とは次の部分である。

龍朔三年歳次癸亥六月癸未朔廿二日乙巳建大唐褚遂良書在周州倅廳

（資料18参照）

同州聖教序の末尾部分（資料18）

○十一字否定説から三十字否定説へ

文末の十一字「大唐褚遂良書在周州倅廳」を、褚遂良が書いたものではないとする、「十一字否定説」の著書（注9）は多いが、文末の三十字を否定する著書は余り見ない。

本文と末尾三十文字の揮毫者が異なる理由として、文字表現といい、文字の字形といい、本文とまったく違うこと。

特に、大唐褚遂良の名前の部分は褚遂良が書いた文字ではなく、高宗の書の中に良く似た書体があると言うこと。

（資料19参照）

高宗の書（李勣碑）

（資料19）

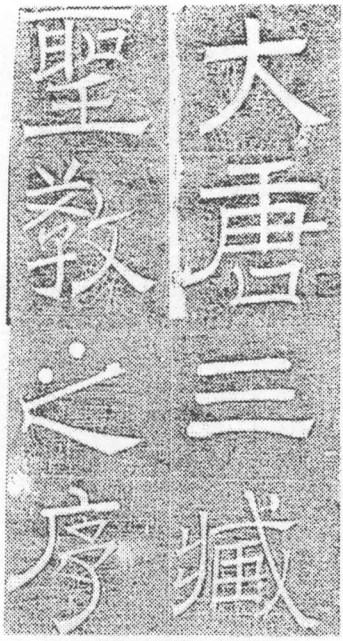
もう一つ褚遂良を称して「大唐褚遂良」と、表現できる人は当時、高宗しかいないと言うこと。（注10）

この年号の時褚遂良は他界しており、この年号から始まる。「末尾三十文字」を書き入れることの出来る人は高宗一人しかいない。これも、同州聖教序の建立に高宗が関与していた事の証しと考えられないだろうか。

第二項　雁塔聖教序を基に作られた同州聖教序

雁塔聖教序と同州聖教序があまりにも部分詳細において似ている所から、「同州聖教序は雁塔聖教序の基になる両文か、もしくは雁塔聖教序の初拓を元にして出来た」のではないかと、考えられる。（序碑の題額と同州聖教序の題額を比較する）

序碑の題額と同州聖教序の題額（資料20・21参照）



（同州聖教序の題額）
（資料20）

（序碑の題額）
（資料21）

序碑の題額と同州聖教序の題額が、よく似ていることは周知のことである。題額も本文同様、雁塔聖教序の基となる両文もしくは雁塔聖教序の初拓を基にして出来ただろう。よく見ていると、同じ一つの物を基にして彫られていることが分かる。その箇所を上に示しておく。

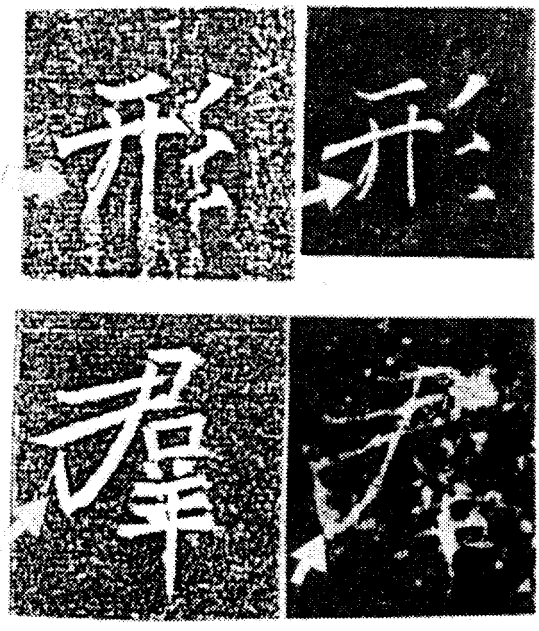
彫師の問題も付きまとってくるが、これほどの線の動きは褚遂良でなければ、他に引ける人はいないだろう。

（雁塔聖教序と同州聖教序の文字を比較する）

本文も同じ一つの物を基にして彫られている事が伺われる。

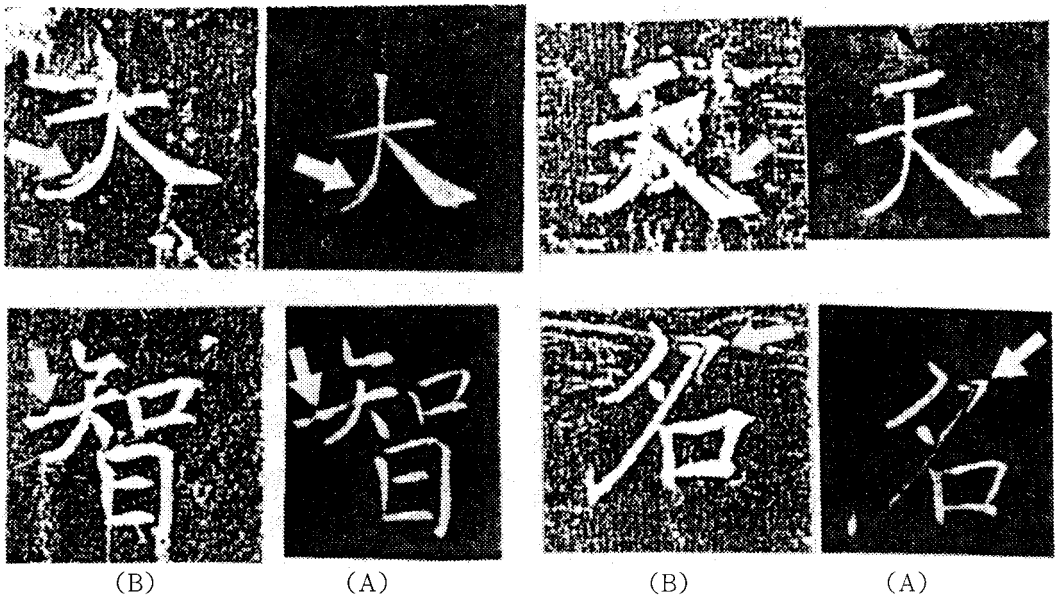
その部分を示す。

同じ一つの物を基にして彫られている部分（資料22—1～4参照）



（B）同州聖教序　　（A）雁塔聖教序

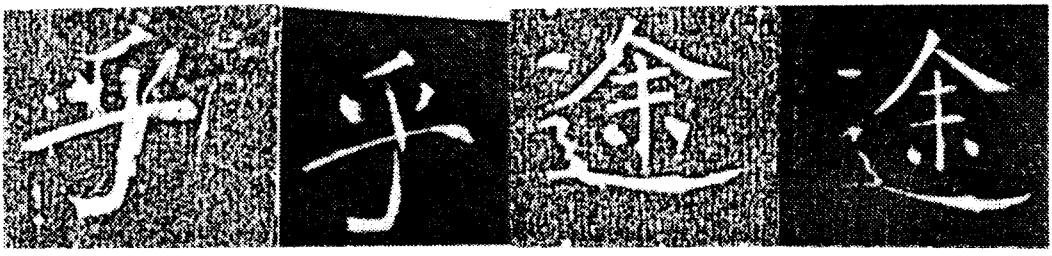
（資料22－1）



（B）　（A）　（B）　（A）

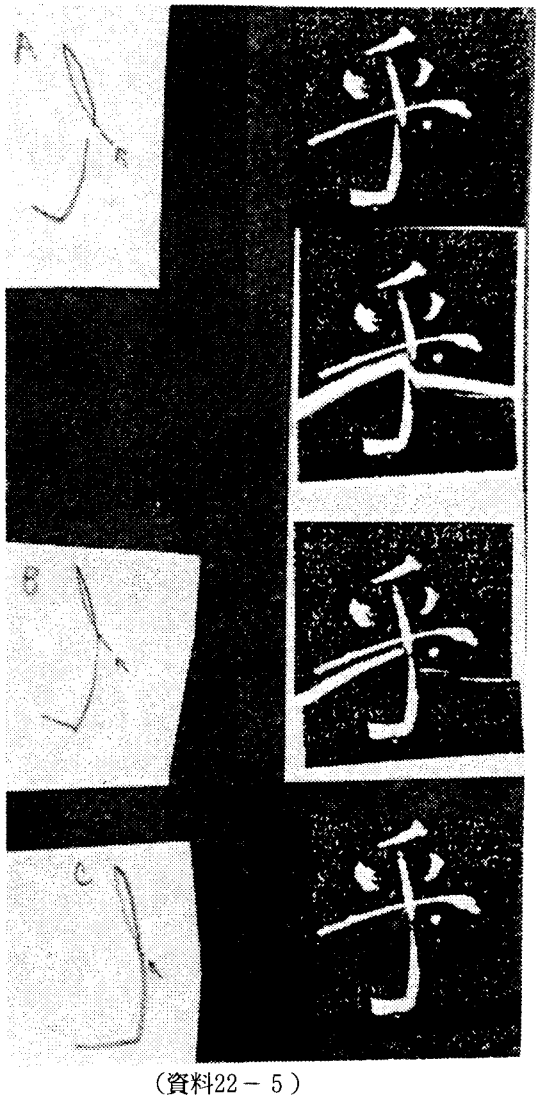
（矢印で示す）

（資料22－2）



(B)　(A)　(B)　(辶の部分)　(A)

(資料22－4)　(資料22－3)



①
②
③
④

(資料22－5)

※(資料22の4)もその一例である。

(B)はやや字形に問題があるが(A)よりその形は出来ている。しかし、この(A)に少しの疑問をもっている。(資料22の5)のように(資料22の4)の(A)の形は(B)と比較してなにかの理由でまげられていると推察出来る。もとの形は(B)によく似ている④ではなかっただろうか。

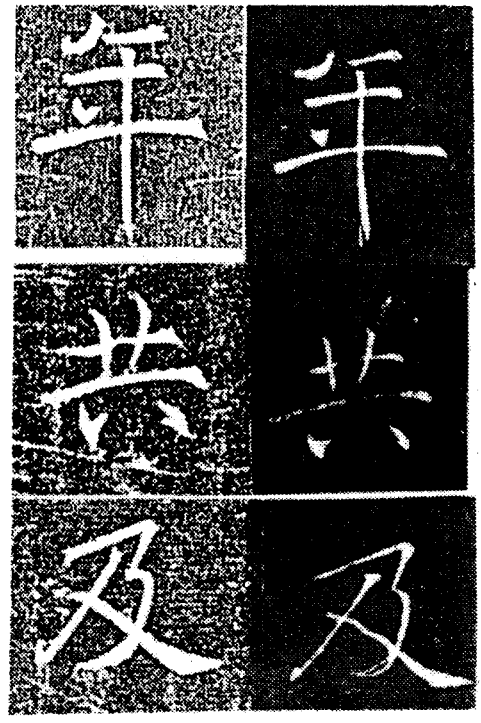
それにしても同じ一つの物を基にして彫られていることはここからも見ることが出来るだろう。

このことを見ても、雁塔聖教序から同州聖教序への道程、「雁塔聖教序の基になる両文か、もしくは雁塔聖教序の初拓を基にして出来た同州聖教序」の、理解が得られるであろう。

（同州聖教序と雁塔聖教序の表現を比較する）

大きさの違いを見る。

（資料23参照）



（資料23）

これは同州聖教序が雁塔聖教序を基にして作られているのに、それに対して疑問点の一つ、同州聖教序は両文、序と序記が同方向に流れており、文字表現が統一されている。もし同州聖教序が雁塔聖教序を基にして作られたのならば行の流れを変えたとしても文字の表現の違いはそのままのはずである。文字の大きさを見ると同州聖教序の方が雁塔聖教序より文字の粒が揃っており、大きいから不思議である。

いずれにしても、雁塔聖教序の石碑の基になった褚遂良揮毫の両文か、雁塔聖教序の初拓を手にする事の出来た人、その人は高宗しかいない。これも又、「高宗は何等かの形で同州聖教序の建立に関与していた」と思われる所以である。

第二節　集字聖教序が意味すること

次に集字聖教序に触れることによって、高宗の同州聖教序と雁塔聖教序に寄せた心情の理解を深めたい。

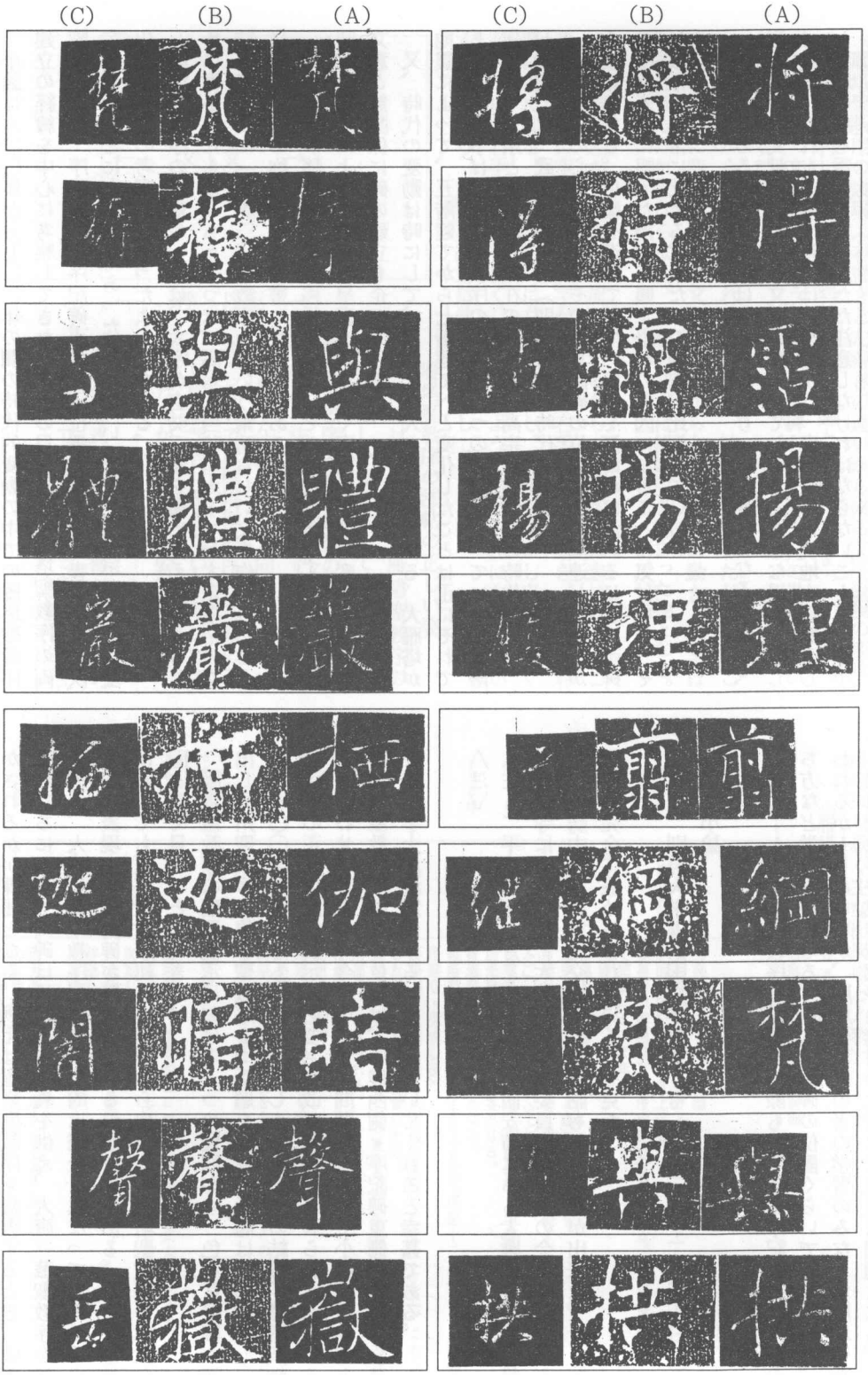
第一項　25年近くも懸かった集字聖教序の完成

太宗の序の文が、六四八年（八月四日）書き上げられ、李治の序記の文が、六四八年（八月五日）書き上げられた。その直後、（注11）「弘福寺の寺主圓定と京城の僧らが、両文を金石に刻して自分の寺に聖教序の建立許可を願い、太宗皇帝許可を得る。のち寺僧の懐仁らが王羲之の書を集めて碑に勒した。」と、『大慈恩三藏法師傳』にある。

それが、集字聖教序として完成したのが六七二年（十二月八日）であるから、完成まで実に25年も経過している。集字聖教序は、太宗・高宗二人の後ろ盾によって出来たのであり、特に高宗に寄る後ろ盾がなければ集字聖教序は完成しなかっただろう。それだけに高宗の意思も集字聖教序の中に反映されていると考えられる。これまでこの同州聖教序、集字聖教序の二つと雁塔聖教序の関連性についての研究は余り見掛けていないが、本格的な三つの聖教序を比較した研究をこの小論を書き上げた後行ってみたい。

以上のことから見て、同州聖教序と集字聖教序は碑の形式を対にせず、一つの形にしたことは、あきらかに太宗を上位に置いている。私考の通り、高宗がこの両碑の建立に関わっているならば、高宗が大唐三蔵聖教序を上位に置き、高宗が太宗に対する敬意の表現と改めて感じる思慕の念と受けとっても良いだろう。

（資料24－１）



（資料24－２）

結章

小論は六〇〇年から七〇〇年の間の時代的変動の中での雁塔聖教序建立の経緯を中心に考察してきた。小論の目的は「『雁塔聖教序の両碑の位置は、序碑西側・序記碑東側が正位置となる』を書道学上に決定づけることにある。」であったが、気づいてみると高宗の心理の変化についての考察に止まったようでもある。

雁塔聖教序の文章の一つは、太宗が玄奘三蔵を褒め称え讃美するために書かれたもの。もう一つは、高宗（当時皇太子）が太宗皇帝の玄奘三蔵の為に「大唐三蔵聖教序」という素晴らしい文を作られたことに対して褒め称えるために書いたものである。

それが時が移り、皇帝が移行すると、その存在位置ですら移行する。時代の変遷によって起きる皇帝を取り巻く家臣の心情の変化は、その文意と無関係に碑の建立も企ててしまう。

又、時代の変動は時にして、自然にも大きく左右される。大雁塔が地震によって、五階建てから七階建てへと変化したことは正にそれである。この事は、雁塔聖教序の両碑に一つの節目を作っている。五階建ては、太宗と高宗両者健在の時代と、高宗のみ健在の時代であり、七階建ては、武則天が皇帝（則天帝）の時代である。

この高宗の心理の変化がそのまま両碑の位置関係に関連しているから複雑になる。小論を進めて見て、研究を深めれば深めるほど、両碑の配置表示に誤った指示を興す恐れの要因になることに気付いた。それは正に皇帝に仕える家臣たちの苦悩と比例している。

小論を進めるとき、文献は決め手となり一つの武器となる。しかし、書道の場合文献のみに頼り文献に縛られてしまうと大きな過ちを犯してしまう恐れもある。時には現地を訪れ、自分の目で現地を見聞きした現地の声も重要となる（ただ注意しなければならないことは、相手はだれでも良いと言うわけではない。）。

又、書道においては小論の問題がどの様に実技の臨書に反映され生かされるかが課題となる。例えば雁塔聖教序を臨書するとき、両碑の生い立ちによって両碑はほぼ逆の意義を供え、大唐三蔵聖教序を学ぶ目的と、大唐三蔵聖教序記を学ぶ目的は完全に異なっている。筆の持ち方・表現方法等両碑が異なっているのがそれである。このことは書においても雁塔聖教序建立の経緯から生まれた雁塔聖教序の偉大な一面として見ることができる。

雁塔聖教序の配置表示における一つの疑問から、色々な疑問が飛び出し同州聖教序と集字聖教序まで話題を広げ、話題は六〇〇～七〇〇年の一〇〇年間の永きものとなってしまった。その結果、雁塔聖教序の両碑の正しい配置表示の必要さを改めて認識させられ、おもしろい巡り合わせでもある。今一つ一つの問題が、すべて小論の目的である「『雁塔聖教序の両碑の位置は、序碑西側・序記碑東側が正位置となる』を書道学上に決定づける」に結び付いてくれると幸甚である。

〈注〉

（注1）平成四年七月二十一日中国西安市にある大雁塔を再度訪ねた。大慈恩寺においては、大慈恩寺管理委員会の方との会談もでき、これまでの訪中にない意見交換と新しい話も伺うことが出来た。そこでも両碑は完全に嵌め込まれている姿を見た。

（注2）別府大学国語国文学第33号〈平成三年十二月三十日付〉に記載の小論。

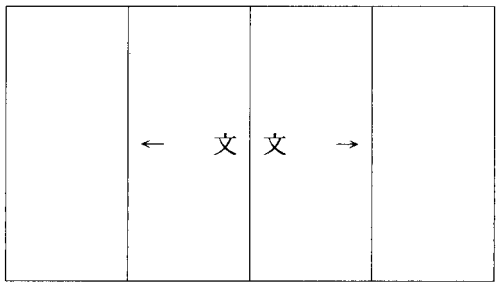
（注3—1）雁塔聖教序を臨書する際も、序碑と序記碑とでは筆の持ち方など学び方が異なる。単なる両碑の位置ぐらいではないかと、思われるかもしれないが、雁塔聖教序の書の学習のみならず雁塔聖教序と同州聖教序や集字聖教序の臨書の比較など大変な問題となる。

（注3―2、雁塔聖教序の学び方）

雁塔聖教序の表現（右書きと左書きの違いから来る文字表現の変化）の学び方に付いて記す。資料の如く、序碑と序記碑ではまったくと言ってよいほど、文字表現が違う。それは序碑と序記碑の行の進行の違いから来ているだろう。

序碑は右から左に行が流れているから、枕腕法で書いただろう。この場合左側に空間があり、文字がないから左手が自由に動き、右手は定着させなければならない。だから文字は終始引き締まった物となる。

序記碑は左から右に行が流れているから、枕腕法では書けない。この場合右側に空間があり文字がないから右手が自由に動き、左手は邪魔にさえなる。だから自然に左手をはずし、右手を浮かし自由に書くか、時には右手を付けて書く、と言ったように自由自在に右手を動かす方法となり、文字は次第に伸び伸びとしてくる。



雁塔聖教序の法帖の正しい姿

ここではもう一つ、雁塔聖教序の法帖の正しい姿を示して置く。

雁塔聖教序の両碑は行の流れが異なるのに、法帖になるとすべて流れが（右から左へ）同じ方向になっている。それでは雁塔聖教序の本来の正しい臨書学習は出来ない。そこで考案したのが次の法帖の姿である。

この形式での臨書学習が望ましいと思うので、今奨励中である。

（注4）（六〇〇年から七〇〇年までの一〇〇年間における雁塔聖教序を取り巻く主な出来事と人物）

〈雁塔聖教序建立・完成まで〉

636			高宗の母、文徳皇后崩御
640			玄奘、インドから帰国
645			太宗の序の文書き上げる。
648			李治の序記の文書き上げる。
648年	8月5日		弘福寺の僧雁塔聖教序の建立許可を得る。「集字聖教序」として完成（672年）
648年	12月		大雁塔建立
648年	9月		褚遂良、中書令
649年	5月24日		太宗崩御、高宗（22歳）皇帝を継ぐ。
650年	11月		褚遂良、同州への左遷、単に「事に坐す（事件の巻き添えをくふ）」の理由。同州刺史となる。
652年	1月		褚遂良、同州より生還。吏部尚書、中書門下三品、監修國史、加光禄大夫、太子賓客となる。
653年			褚遂良、尚書右僕射となる。
			雁塔聖教序の完成、序十月十五日。序記十二月十日。〈雁塔聖教序建立・完成以後〉
655年	9月		高宗、王皇后を廃し武昭儀を皇后にしようとした。これに反対した褚遂良を潭州都督にする。
	10月		武昭儀、皇后となる。この後武皇后、王廃后を暗殺。褚遂良、桂州都督にさせられる。
657年	3月		褚遂良、愛州刺史にさせられる。
	8月		愛州で死亡。
658年	10月		高宗、病のため政務を武皇后に委ねる。
660年	6月23日		同州聖教序の完成
663年	12月		高宗、武皇后の廃位を企てるが失敗。この後天下の政権は完全に武皇后に移る。
664年			集字聖教序の完成
670			高宗崩御。中宗帝位につく。武皇后、武太后となる。
672年	12月8日		武太后、中宗廃帝として睿宗帝位につけ政務を総て自分の手で決定した。
680			武太后が詔を下し、睿宗に実行させようとした。それを睿宗は辞退した。
683年	12月		武太后、則天帝となる。
684年	2月		則天帝、大雁塔を五層から七層へ延ばす。
686年	1月		則天帝病重く、中宗返り咲く。
690年	9月		武太后崩御
700			
1	1月		
5	11月		

（注5）

(A) 雁塔聖教序

尊文韻刻字。

十二月戊寅朔十日丁亥建。尙書右僕射上柱國河南郡開國公臣褚遂良書。

略舉大綱。以爲斯記。

皇帝在春宮日製此文。永徽四年歲次癸丑。

理含金石之聲。文抱風雲之潤。冶範以輕塵足樂。堅圓恭流。

齊三光之明。我皇福運。同二儀之固。伏見 御製衆經論序。照古騰今。

皎幽晤而恆明。自非久植勝緣。何以順揚斯旨。所謂法相常住。

凡六百五十七部。引大海之法流。洗塵勞而不竭。傳智燈之長圓。

利物爲心。以貞觀十九年二月六日。奉勅於弘福寺。翻譯聖教要文。

終期滿字。頻至雪嶺。更獲半珠。問道往還。十有七載。備通釋典。

會一乘之旨。隨機化物。以中華之無實。尋印度之眞文。遠涉恆河。

凝情定室。匿跡幽巖。栖思三禪。巡遊十地。超六塵之境。獨步伽維。

玄奘法師者。夙懷聰令。立志夷險。神清朗朗之年。體拔群萃之世。

萬區分義。擲成乎實。豈與湯武校其優劣。堯舜比其聖德者哉。

爲發炬之光。火宅之朝。降法雨之潤。於是百川異流。同會於海。

法性凝寂。靡歸心而不通。智地玄奧。感慈誠而遂顯。豈謂重昏之夜。

遂使阿耨達水。通神甸之八川。書闡崑山。接寓華之翠嶺。園以

敷衽而朝萬國。風加朽骨。石室開貝葉之文。澤及昆蟲。金匱流梵說之偈。

興天花而合彩。伏惟 皇帝陛下。上玄賓寵。重拱而治八荒。德被勳寮。

慈日法流。轉蓮輪於鹿苑。排空寶蓋。接翔雲而共飛。莊野春林。

展遠古而飄帶。赴靈鷲與同。經塵劫而不朽。晨鐘夕梵。交二音於鷲峯。

啓三藏之祕扃。是以名無翼而長飛。道無根而永固。道名流慶。

緣無惡而不斷。開法網之綱紀。弘六度之正教。採眞有之金炭。

瑚之者。莫測其際。故知。聖慈所被。業無普而不蹤。妙化所敷。

極空有之精微。體生滅之機要。詞茂道曠。尋之者。不究其源。文廣義幽。

蓋眞如聖教者。諸法之玄宗。衆經之軌圖也。探指宏遠。與言聖深。

夫順揚正教。非智無以窺其文。崇闡微言。非賢莫能定其旨。

大唐皇帝述三藏聖教序記。

② 序　記　碑

(B) 同州聖教序

大唐太宗文皇帝製。三藏聖教序。

蓋聞。二儀有象。覆載以含生。四時無形。潛寒暑以化物。是以寰宇鑑其

層臺曾巒疊其翠嶺。明發洞陽。實哲人之所見。險陽處乎天地。而難窮者。以其有象也。

險陽處乎天地。而難窮者。以其有象也。陰陽處乎天地。而難窮者。以其無形也。故知。象顯可徵。雖察不感。形潛莫覩。在智猶迷。

況乎佛道崇虛。乘幽投寂。弘濟萬品。典御十方。攝威靈而無上。

抑神力而無下。大之則彌於宇宙。細之則攝於毫釐。無滅無生。

歷千劫而不古。若隱若顯。運百福而長今。妙道凝玄。遠之莫知其際。

法流湛寂。挹之莫測其源。故知。靈鷲凡感。區域層巒。投其旨趣。

能無疑惑者哉。然則大教之興。基乎西土。騰漢庭而夜夢。照東域而流慈。

昔者分形分蹟之時。言未聽而成化。當常現常住之世。人仰德而知遵。

及乎晦影歸眞。遺教越世。金容掩色。不敏三千之光。靈鷲閉圖。

空端四八之相。於是微言寂滅。拯含類於三途。遺訓覆宣。導羣

生於十地。然而眞教難仰。莫能一其指歸。曲學邪辭。邪正於焉紛糾。

所以空有之論。或習俗而雖聲。有玄奘法師者。

法門之領袖也。幼懷貞敏。早悟三空之心。長契神情。先哲四忍之行。

松風水月。未足比其清華。仙露明珠。詎能方其明潤。故以智通塵累。

神測未形。超六塵而迥出。獨鶴凌雲。悲正法之陵遲。栖靈玄門。

閉茲後學。是以獨心淨土。往遊西域。乘危達道。杖策孤征。履雪飛

塗。聞失地。驚砂之起。空外迷天。萬里山川。擬接靈而遙影。百重寒暑。

幽求正教。雪林八水。味道清風。摩訶鷲峯。一乘五律之源。

受眞教於上賢。探賾奧旨。一乘五律之源。馳靈於心田。

八藏三藏之文。波濤於目海。爰自所歷之國。

凡六百五十七部。翻布中夏。宣揚勝業。引慈悲於西極。庄法雨於東垂。

國教。缺而復全。蓋生靈有福。聖賢出世。

朗愛水之晉波。同聚彼岸。是知。聖因寶堅。善以緣昇。昇堅之端。

惟人所託。譬夫桂生高嶺。雲霧方得沒其花。蓮出淤泥。

飛塵不能汙其葉。非蓮性自潔。而桂實本四。頁由所附者高。

則微物不能累。所憑者淨。則聞類不能沾。夫以卉木無知。

善而成善。況乎人倫有識。不緣聖而求慶。方蒙玆經流施。將日月而無窮。

斯福源敷。與乾坤而永大。

① 序　碑

(C) 集字聖教序

大唐三藏聖教序。太宗文皇帝製。弘福寺沙門懷仁。集晉右將軍王羲之書。

蓋聞。二儀有像。覆載以含生。四時無形。潛寒暑以化物。是以寰宇鑑

層臺曾巒疊其翠嶺。明發洞陽。實哲人之所見。險陽處乎天地。而難窮者。以其有象也。

險陽處乎天地。而難窮者。以其無形也。故知。象顯可徵。雖察不感。形潛莫覩。在智猶迷。

況乎佛道崇虛。乘幽投寂。弘濟萬品。典御十方。攝威靈而無上。抑神力而無下。

大之則彌於宇宙。細之則攝於毫釐。無滅無生。歷千劫而不古。若隱若顯。運百福而長今。

妙道凝玄。遠之莫知其際。法流湛寂。挹之莫測其源。故知。靈鷲凡感。區域層巒。投其旨趣。

能無疑惑者哉。然則大教之興。基乎西土。騰漢庭而夜夢。照東域而流慈。

昔者分形分蹟之時。言未聽而成化。當常現常住之世。人仰德而知遵。

及乎晦影歸眞。遺教越世。金容掩色。不敏三千之光。靈鷲閉圖。

空端四八之相。於是微言寂滅。拯含類於三途。遺訓覆宣。導羣

生於十地。然而眞教難仰。莫能一其指歸。曲學邪辭。邪正於焉紛糾。所以空有之論。

法門之領袖也。幼懷貞敏。早悟三空之心。長契神情。先哲四忍之行。

松風水月。未足比其清華。仙露明珠。詎能方其明潤。故以智通塵累。

神測未形。超六塵而迥出。獨鶴凌雲。悲正法之陵遲。栖靈玄門。

閉茲後學。是以獨心淨土。往遊西域。乘危達道。杖策孤征。履雪飛

塗。聞失地。驚砂之起。空外迷天。萬里山川。擬接靈而遙影。百重寒暑。

幽求正教。雪林八水。味道清風。摩訶鷲峯。一乘五律之源。

受眞教於上賢。探賾奧旨。一乘五律之源。馳靈於心田。

八藏三藏之文。波濤於目海。爰自所歷之國。

凡六百五十七部。翻布中夏。宣揚勝業。引慈悲於西極。庄法雨於東垂。

國教。缺而復全。蓋生靈有福。聖賢出世。

朗愛水之晉波。同聚彼岸。是知。聖因寶堅。善以緣昇。昇堅之端。

惟人所託。譬夫桂生高嶺。雲霧方得沒其花。蓮出淤泥。

飛塵不能汙其葉。非蓮性自潔。而桂實本四。頁由所附者高。

則微物不能累。所憑者淨。則聞類不能沾。夫以卉木無知。

善而成善。況乎人倫有識。不緣聖而求慶。方蒙玆經流施。將日月而無窮。

斯福源敷。與乾坤而永大。

① 序　碑

① 序　碑

大唐太宗文皇帝製。三藏聖教序。
蓋聞。二儀有像。顯覆載以含生。四時無形。潛寒暑以化物。
是以窺天鑑地。庸愚皆識其端。明陰洞陽。賢哲罕窮其數。
然而天地苞乎陰陽。而易識者。以其有象也。陰陽處乎天地。而難窮者。
以其無形也。故知。象顯可徵。雖愚不惑。形潛莫覩。在智猶迷。
況乎佛道崇虛。乘幽控寂。弘濟萬品。典御十方。擧威靈而無上。
抑神力而無下。大之則彌於宇宙。細之則攝於毫釐。無滅無生。
歷千劫而不古。若隱若顯。運百福而長今。妙道凝玄。遵之莫知其際。
法流湛寂。挹之莫測其源。故知。蠢蠢凡愚。區區庸鄙。投其旨趣。
能無疑惑者哉。然則大教之興。基乎西土。騰漢庭而皎夢。照東域而流慈。
昔者分形分跡之時。言未馳而成化。當常現常之世。人仰德而知遵。
及乎晦影歸眞。遷儀越世。金容掩色。不鏡三千之光。麗象開圖。
空端四八之相。於是微言廣被。拯含類於三途。遺訓遐宣。導羣
生於十地。然而眞教難仰。莫能一其指歸。曲學易遵。邪正於焉紛糾。
所以空有之論。或習俗而是非。大小之乘。乍沿時而隆替。有玄奘法師者。
法門之領袖也。幼懷貞敏。早悟三空之心。長契神情。先苞四忍之行。
松風水月。未足比其清華。仙露明珠。詎能方其朗潤。故以智通無累。
神測未形。超六塵而迥出。隻千古而無對。凝心內境。悲正法之陵遲。
栖慮玄門。慨深文之訛謬。思欲分條析理。廣彼前聞。截僞續眞。
開茲後學。是以翹心淨土。往遊西域。乘危遠邁。杖策孤征。積雪晨飛。
途閒失地。驚砂夕起。空外迷天。萬里山川。撥烟霞而進影。百重寒暑。
躡霜雨而前蹤。誠重勞輕。求深願達。周遊西宇。十有七年。窮歷道邦。
詢求正教。雙林八水。味道餐風。鹿菀鷲峯。瞻奇仰異。承至言於先聖。
受眞教於上賢。探賾妙門。精窮奧業。一乘五律之道。馳驟於心田。
八藏三篋之文。波濤於口海。爰自所歷之國。總將三藏要文。凡
六百五十七部。譯布中夏。宣揚勝業。引慈雲於西極。注法雨於東垂。
聖教缺而復全。蒼生罪而還福。濕火宅之乾燄。共拔迷途。
朗愛水之昏波。同臻彼岸。是知。惡因業墜。善以緣昇。昇墜之端。
惟人所託。譬夫桂生高嶺。雲露方得泫其花。蓮出淥波。
飛塵不能汙其葉。非蓮性自潔。而桂質本貞。良由所附者高。
則微物不能累。所憑者淨。則濁類不能霑。夫以卉木無知。猶資
善而成善。況乎人倫有識。不緣慶而求慶。方冀茲經流施。將日月而無窮。
斯福遐敷。與乾坤而永大。
永徽四年歲次癸丑。
十月己卯朔十五日癸巳建。　中書令臣褚遂良書。

② 序　記　碑

大唐皇帝述三藏聖教序記。
夫顯揚正教。非智無以廣其文。崇闡微言。非賢莫能定其旨。
蓋眞如聖教者。諸法之玄宗。衆經之軌躅也。綜括宏遠。奧旨遐深。
極空有之精微。體生滅之機要。詞茂道曠。尋之者。不究其源。文顯義幽。
理之者。莫測其際。故知。聖慈所被。業無善而不臻。妙化所敷。
緣無惡而不翦。開法網之綱紀。弘六度之正教。拯羣有之塗炭。
啓三藏之秘扃。是以名無翼而長飛。道無根而永固。道名流慶。
歷遂古而鎭常。赴感應身。經塵劫而不朽。晨鐘夕梵。交二音於鷲峯。
慧日法流。轉雙輪於鹿菀。排空寶蓋。接翔雲而共飛。莊野春林。
與天花而合彩。伏惟。皇帝陛下。上玄資福。垂拱而治八荒。德被黔黎。
斂衽而朝萬國。恩加朽骨。石室歸貝葉之文。澤及昆蟲。金匱流梵說之偈。
遂使阿耨達水。通神甸之八川。耆闍崛山。接嵩華之翠嶺。竊以。
法性凝寂。靡歸心而不通。智地玄奧。感懇誠而遂顯。豈謂重昏之夜。
燭慧炬之光。火宅之朝。降法雨之澤。於是百川異流。同會於海。
萬區分義。總成乎實。豈與湯武校其優劣。堯舜比其聖德者哉。
玄奘法師者。夙懷聰令。立志夷簡。神清齠齔之年。體拔浮華之世。
凝情定室。匿跡幽巖。栖息三禪。巡遊十地。超六塵之境。獨步伽維。
會一乘之旨。隨機化物。以中華之無質。尋印度之眞文。遠涉恒河。
終期滿字。頻登雪嶺。更獲半珠。問道往還。十有七載。備通釋典。
利物爲心。以貞觀十九年二月六日。奉勅於弘福寺。翻譯聖教要文。
凡六百五十七部。引大海之法流。洗塵勞而不竭。傳智燈之長燄。
皎幽闇而恒明。自非久植勝緣。何以顯揚斯旨。所謂法相常住。
齊三光之明。我皇福臻。同二儀之固。伏見御製衆經論序。照古騰今。
理含金石之聲。文抱風雲之潤。治輒以輕塵足嶽。墜露添流。
略擧大綱。以爲斯記。　皇帝在春宮日製此文。　龍朔三年歲次癸亥六月
癸未朔廿三日乙巳建大唐褚遂良書在同州倖廳。

② 序　記　碑

皇帝在春宮。述三藏聖記。
夫顯揚正教。非智無以廣其文。崇闡微言。非賢莫能定其旨。蓋眞如聖教者。
諸法之玄宗。衆經之軌躅也。綜括宏遠。奧旨遐深。極空有之精微。體生滅之機要。
詞茂道曠。尋之者。不究其源。文顯義幽。履之者。莫測其際。故知。聖慈所被。
業無善而不臻。妙化所敷。緣無惡而不翦。開法網之綱紀。弘六度之正教。
拯羣有之塗炭。啓三藏之秘扃。是以名無翼而長飛。道無根而永固。道名流慶。
歷遂古而鎭常。赴感應身。經塵劫而不朽。晨鐘夕梵。交二音於鷲峯。慧日法流。
轉雙輪於鹿菀。排空寶蓋。接翔雲而共飛。莊野春林。與天花而合彩。伏惟。
皇帝陛下。上玄資福。垂拱而治八荒。德被黔黎。斂衽而朝萬國。恩加朽骨。
石室歸貝葉之文。澤及昆蟲。金匱流梵說之偈。遂使阿耨達水。通神甸之八川。
耆闍崛山。接嵩華之翠嶺。竊以。法性凝寂。靡歸心而不通。智地玄奧。
感懇誠而遂顯。豈謂重昏之夜。燭慧炬之光。火宅之朝。降法雨之澤。
於是百川異流。同會於海。万區分義。總成乎實。豈與湯武校其優劣。
堯舜比其聖德者哉。玄奘法師者。夙懷聰令。立志夷簡。神清齠齔之年。
體拔浮華之世。凝情定室。匿迹幽巖。栖息三禪。巡遊十地。超六塵之境。
獨步迦維。會一乘之旨。隨機化物。以中華之無質。尋印度之眞文。遠涉恒河。
終期滿字。頻登雪嶺。更獲半珠。問道往還。十有七載。備通釋典。利物爲心。
以貞觀十九年二月六日。奉勅於弘福寺。翻譯聖教要文。凡六百五十七部。
引大海之法流。洗塵勞而不竭。傳智燈之長燄。皎幽闇而恒明。自非久植勝緣。
何以顯揚斯旨。所謂法相常住。齊三光之明。我皇福臻。同二儀之固。
伏見御製衆經論序。照古騰今。理含金石之聲。文抱風雲之潤。治輒以輕塵足岳。
墜露添流。略擧大綱。以爲斯記。治素無才學。性不聰敏。內典諸文。殊未觀覽。
所作論序。鄙拙尤繁。忽見來書。褒揚讚述。撫躬自省。慚悚交幷。勞師等遠臻。
深以爲愧。　貞觀廿二年八月三日內出。

③ 般　若　心　経

般若波羅蜜多心經。　沙門玄奘奉詔譯。
觀自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。舍利子。
色不異空。空不異色。色卽是空。空卽是色。受想行識。亦復如是。舍利子。
是諸法空相。不生不滅。不垢不淨。不增不減。是故空中無色。無受想行識。
無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界。乃至無意識界。無無明。
亦無無明盡。乃至無老死。亦無老死盡。無苦集滅道。無智亦無得。
以無所得故。菩提薩埵。依般若波羅蜜多故。心無罣礙。無罣礙故。
無有恐怖。遠離顚倒夢想。究竟涅槃。三世諸佛。依般若波羅蜜多故。
得阿耨多羅三藐三菩提。故知。般若波羅蜜多。是大神呪。是大明呪。
是無上呪。是無等等呪。能除一切苦。眞實不虛故。說般若波羅蜜多呪。
卽說呪曰。揭諦揭諦　般羅揭諦　般羅僧揭諦　菩提莎婆呵　般若多心經。
太子太傅尚書左僕射燕國公　于志寧。中書令南陽縣開國男來濟。
禮部尚書高陽縣開國男許敬宗。守黃門侍郎兼左庶子薛元超。
守中書侍郎兼右庶子李義府等。奉勅潤色。　咸亨三年十二月八日。
京城法侶建立。　文林郞諸葛神力勒石。　武騎尉朱靜藏鐫字。

※釈文は、二玄社・中国法書選・書苑等による。

（注6）「書道全集8、38ページ参照」にあることを記す。
書道全集には八月五日の間違いではないかと記されている

いまひとつ問題とすべきは，高宗の答書のあとに、貞観二十二年八月三日内出（插48）と、ある日附であって、これは玄奘法師哀啓（知恩院本）（插44）には八月五日となっている。太宗の序も高宗の記も、大唐故三藏玄奘法師行状によれば、八月四日に下賜されたのは明らかであるから、これに對する玄奘の謝書、兩帝の答書が、表啓にあるがごとく八月五日であることは誤りないであろう。いったい、三と五とは誤りやすい文字ではあるが、はじめから何かの事情で誤っていたのか、あるいはこの碑が原石ではなく摸刻であるとすれば、そのとき誤ったのか、いずれにしても、金石文かならずしも信ずるにたらざる一例とすることができよう。

（注7）「両碑が建立当時、大雁塔の最上層に存在した。」と、記された著書
大慈恩寺三藏法師傳卷第七（唐）慧立彦悰著

上層以石爲室。南面有兩碑、載二聖《三藏聖教序》、《記》、其書即尚書右僕射河南公褚遂良之筆也。

（注8）（大慈恩寺管理委員会の方との会談の一部）
大慈恩寺管理委員会の方との会談は、大慈恩寺の大雁塔に向かって左下にある応接室で行われた。大慈恩寺側として、大慈恩寺管理委員会副主任の永明氏と、大慈恩寺管理委員会の服務員の二人。こちらは現地通訳そして私の二人、計四人で行った。
内容は「雁塔聖教序の両碑とその周辺」についてである。この話は別府大学の書道研究室のビデオ班が全部収録しており、帰国後中国語の会話部分を群英氏に依頼し、完全訳文したものを中心にして小論に役立てた。
この時の永明氏との話は小論の中に置いてその都度記すが。話の途中突然出て来た次の話題だけは注目すべき内容を含んでおり、会話のまま示すことにする。

（突然に出た『大唐三蔵聖教序記』の複製問題）

服務員　この、大唐三蔵聖教序記は一度壊れたことがある。その時、刻み直している。
荒　金　一度壊れた？　刻み直したと言うのですか。
複製品？複製品と言うのですか。
あれは、複製品では無いでしょう。無いですよ。
永明氏　複製品ではありません。
皆同じ時代の物だから、複製品ではありません。
王通訳　それじゃ、刻み直した時、両碑の位置を間違えたのではないの。
服務員　その時、大唐三蔵聖教序記の中の褚遂良のサインの位置が変わったかもしれない。
彼（荒金）に言って、こういう事情がある。
服務員　壊れた後、まもなく刻み直している。同じ時代にだ。
永明氏　複製品では無い。
双方とも本物だ。
永明氏　あなた（服務員）の話は話題が違う、今は、このサインの位置に付いて話しているんだ。
（略）
服務員　大唐三蔵聖教序記の残碑は今、西安碑林にある。
……
以上が、大慈恩寺管理委員会副主任永明氏との会談の一部である。

（注9）「十一字否定説」の著書
書苑第五巻・第十號（雁塔聖教序號）

重摹にあらざること顯然たり。且、同州の後款は、但、立碑の年月を記し、雁塔聖教序について瓶盦官僧を稱せず。大唐褚遂良書。在同州倅廳の十一字に至りては、並にまたこれ褚書にあらず。

（注10）
「もう一つ褚遂良を称して「大唐褚遂良」と、表現できる人は当時、高宗しかいないと言うこと」このことに於いては少し説明を加えることがある。
雁塔聖教序に次のようにあるが、これは正しくは矢印の通りである。
普通「大唐」は皇帝に掛るもの。前記の間違いとは異なり「大唐褚遂良」では「大唐」は完全に褚遂良に掛かっている。故にこの言い方は皇帝しか表現できず、皇帝と言えば自ずから高宗をさしている。

（注11）時弘福寺寺主圓定及京城僧等、請鐫二序文於金石、藏之寺宇、帝可之。後寺僧懷仁等及鳩集晉右軍將軍王羲之書、勒於碑石焉。と、『大慈恩三藏法師傳』にある。

―平成四年十月五日　受理―